

フェリックス・メンデルスゾーンは、19 世紀ドイツ・ロマン派において、古典的な均衡と瑞々しい抒情性を極めて高度な次元で融合した作曲家。本プログラムでは、彼が若き日に示した驚異的な早熟さと、短い生涯の終盤に到達した峻厳な深化を、ピアノと弦楽器の多様な編成によって迎える。

「ピアノ四重奏曲 第 3 番」(1825) は、弱冠 16 歳のメンデルスゾーンが、文豪ゲーテに献呈した記念碑的作品。当時、彼はすでに「弦楽八重奏曲」という傑作を書き上げており、この四重奏曲においても、ピアノの華麗な名人芸と弦楽器の緊密な対話が見事に溶け合っている。のちの《真夏の夜の夢》を予感させるスケルツォ楽章の軽妙洒脱な筆致などは、まさにメンデルスゾーンならではのよう。

「ピアノ三重奏曲 第 1 番」(1839) は、シューマンが「ベートーヴェン以来、最も偉大なピアノ三重奏曲」と絶賛したロマン派室内楽の傑作。全曲を支配するニ短調の情熱的な主題が、聴き手を一気に作品世界へと引き込む。名作「無言歌」を彷彿とさせる第 2 楽章の甘美な旋律や、第 3 楽章の妖精が舞うような快活さ、そしてフィナーレの輝かしい高揚など、メンデルスゾーンの旋律美と構成力が極限まで高められている。

「弦楽五重奏曲 第 2 番」(1845) は、死のわずか 2 年前（といっても、まだ 36 歳だった！）に書かれた円熟期の名品。通常弦楽四重奏にヴィオラを加えた編成により、中音域・内声部の充実が図られている。第 1 楽章の力強い主題に始まり、第 2 楽章における軽妙かつ優美な佇まい、第 3 楽章で垣間見える深い悲劇性、そして嵐のように躍動するフィナーレに至るまで、人生の艱難を経たメンデルスゾーンの深い精神性が刻印されている。